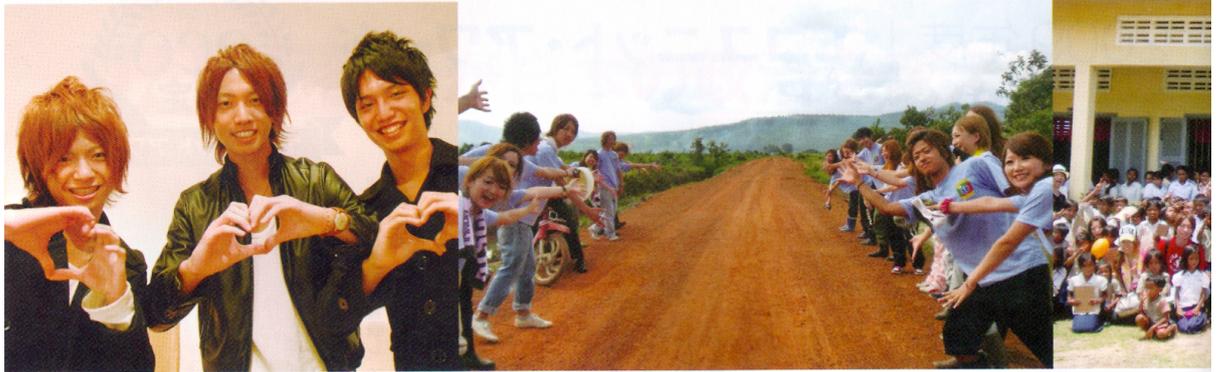




reportage



左から、高橋 遼、川崎 洋、蚊野詞旭

国道から診療所まで40分かかっていたところが10分に短縮された

います。参加者には感想を言ってもいい、カンボジア支援に対するモチベーションが上がるように努めています。この10分間のカンボジア・スピーチをとても大切にしていますね。

先輩の活動を引き継いでいます。その前から途上国支援に興味があったのでしょうか。

川崎 僕は、漠然と何か熱いことをしたいと思っていて、入学したばかりの頃、グラフィスに所属することを決めました。

カンボジアの子どもたちは勉強しなくてもできない。夢に向かって努力することが難しい。生まれた場所が違うだけで叶わない夢がある。生まれた場所で決まる運命なんて受け入れたくない。何かしたいと思えたんですね。

でも、実は、もともとボランティアにもカンボジアにも興味がなかったのです。1年の夏にスタディツアーに行ってから、考えが変わりました。ボランティアと聞くと、助ける、与えるといったイメージが強いのですが、僕は逆に与えてもらったことの方が多かった。カンボジアのためにしたことが自分のためにもなっている実感があって、09年のスタディツアー後に代表を務めることになったのです。スタディツアーには、1人当たり約15万円(1週間滞在)で参加できます。

蚊野 僕は浪人時代、テレビ番組の「情熱大陸」でマザーハウス代表の山口絵理子さんを見て、自分も何か人の役に立つ仕事が見たいと思えました。大学に入って遊んでいても何か楽しくないかと思っていたら、「僕たちは世界を変えることができる。『パレード』という本で石松さんを知り、ミーティングに参加することにしました。08年9月にグラフィスに入り、09年3月には診療所の開院式に行っただけで夢が持てない。現地での体験をもっと知ってほしい。」

高橋 僕は09年2月に入ったのですが、大学に入る時からボランティアや国際支援に興味があり、友人から

蚊野 高橋 蚊野

この続きは、オルタナ17のウェブサイト <http://www.alterna.co.jp>に掲載いたします。